

琉球大学学術リポジトリ

沖縄島の河川に生息するハゼ亜目の浮遊仔魚の形態と浮遊仔魚期の長さ

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学21世紀プログラム 公開日: 2007-06-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 前田, 健, 山崎, 望, 立原, 一憲 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/680

沖縄島の河川に生息するハゼ亜目の浮遊仔魚の形態と
浮遊仔魚期の長さ
(Morphologies and durations of pelagic larvae of gobioid fishes
which inhabit in streams on Okinawa Island)

前田 健¹・山崎 望¹・立原一憲² (Ken Maeda, Nozomi Yamasaki
and Katsunori Tachihara)

¹琉球大学大学院理工学研究科, ²琉球大学理学部

琉球列島の河川に生息する在来魚類の多くは、河川と海とを回遊していると考えられるが、その回遊の過程について具体的な知見は少ない。河川産魚類の大半を占めるハゼ亜目の多くは、河川内で産卵し、孵化した仔魚が海域へと流下して浮遊仔魚期を過ごし、その後再び河川に加入して底生生活に移行すると考えられている。浮遊仔魚期の生態はほとんど未解明である。ハゼ亜目は非常に多くの種を含むが、浮遊仔魚期の形態が知られている種はごく一部である。従来の研究では、同定の困難さから単に「ハゼ亜目仔魚」と扱われることが多く、浮遊仔魚の研究における障害となってきた。

本研究では、沖縄島北部の海岸および河川感潮域においてハゼ亜目浮遊仔魚の採集を行い、海産種も含む55タクサを区別して記載し、そのほとんどを属または種レベルまで同定した。また、浮遊仔魚の標本が得られなかった7種について、浮遊仔魚期の特徴を残す着底後の稚魚を採集し、形態を記載した。これらの同定が可能となったことで、浮遊仔魚に関する今後の研究の大きな発展が見込まれる。

その形態は多様であったが、ヨシノボリ属とナガノゴリを除くほとんどの仔魚の発育段階は比較的均一であり、着底直前に海岸または河川感潮域に出現したものと考えられた。河川加入時の標準体長は、25~29 mmのボウズハゼから約4 mmのクロコハゼ、タネハゼ、ウチワハゼまでさまざま、一般に淡水域に生息する種では大きく、感潮域に生息する種には小さいものが多かった。

浮遊仔魚および着底直後の仔稚魚の耳石輪紋数から、浮遊仔魚期の長さを推定した結果、成魚が感潮域に生息する種の大半は1ヵ月前後であったのに対し、ボウズハゼ亜科やカワアナゴ属などは2~6ヵ月と長かった。後者は加入時期と産卵期の関係や出現状況、分布から、浮遊仔魚期に広く分散する可能性が示唆され、長い浮遊仔魚期がその分散に強く影響していると考えられた。同じく淡水域に生息するヨシノボリ属とナガノゴリの浮遊仔魚期は約1~2ヵ月と短く、また鰭が完成していない若齢の浮遊仔魚も海岸および感潮域で多数採集されたことから、比較的岸近くで浮遊期を過ごし、あまり分散しないと考えられた。